THE GREAT BATTLE OVER DRIVE

幻龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE GREAT BATTLE OVER DRIVE

【Ｎコード】

Ｎ０６０３ＢＡ

【作者名】

幻龍

【あらすじ】

仮面ライダー・ウルトラマン・ガンダムといった『コンパチヒーロー』が住む『コンパチワールド』が存在する世界、悪しき者達の魔の手が迫りつつある地球の危機を察知したウルトラマンキングは三人の新世代コンパチヒーロー…『世界の破壊者たる仮面の戦士』仮面ライダーディケイド・『新たなる光の戦士』ウルトラマンゼロ・『運命の名を持つ機動戦士』デスティニーガンダムを地球へ向かわせるのだが…？

第一話－集結、三人のコンパチヒーロー！－（前書き）

はじめましての皆様ははじめまして、ご存知の皆様はお久しぶりです、新年＆ａｍｐ；新作投稿を機に名前を幻龍と改めました元・柳雨です

本作は仮面ライダー・ウルトラマン・ガンダムといった版権や世界観、サイズ的問題の垣根を越えたゲーム『ザ・グレイトバトル』シリーズ復活の吉報に狂喜乱舞した作者が懲りずに新連載として書いたグレイトバトルの二次創作です、キャラ大崩壊なギャグ的要素全開ですので閲覧の際にはご注意ください（汗）

第一話ー集結、三人のコンパチヒーロー！ー

ー我々、人間が住む地球から遠く離れた宇宙…そこには仮面ライダー・ウルトラマン・ガンダムなどのヒーロー達やその敵である怪人・怪獣・モビルスーツなどのライバル達が暮らしている『コンパチワールド』が存在している。

ーこれは三人のコンパチワールド出身のヒーロー『コンパチヒーロー』…『「世界の破壊者」たる仮面の戦士』・『若き光（「ZERO」）の戦士』・『「運命」の名を持つ機動戦士』の地球を舞台にした、新たな戦いの物語である…。

ー宇宙に数多あるコンパチワールドの一つがあるスペースコロニー、ここを治めるウルトラマンキングの城にて…。

「よく来てくれた、三人とも。」

ー玉座に座るマントを羽織った威厳あるヒゲのじじい…ではなくウルトラマンキングは彼が呼んだヒーロー…頭に特徴的な二本のカッターを生やした青と赤のボディカラーに鋭い眼をした若き光の戦士・ウルトラマンゼロ、赤き翼と青い機体カラーに眼の下に赤いラインが引かれたモビルスーツ・デスティニーガンダムをまっすぐ見つめるがここでキングはあることに気づいた…。

「…って、おい待たんか！なんで二人しかいないんじゃ！？」

「そういえば…おいデスティニー、『アイツ』はどうした？」

「あれ？ゼロも知らないのか？オレはてっきりゼロにでも連絡が来てるかと…。」

ー…よくよく見たらヒーローは三人ではなくゼロとデスティニーの『二人だけ』だったためキングは盛大にツッコミを入れたが、最後の一人が何故いないのかに関しては二人は全く知らないらしい。

ー…と、その時、どこからともなくバイクのエンジン音が…。

「どけどけー！死にたくなけりゃどいてろー！！」

「「どわぁあああああああ！？」」

ーすると王室のドアがいきなりブチ破られ、バイクに乗った何者かが乱入してきたためゼロとデスティニーは思わず避けてしまった。

「…へ？ギャアアアアアアアアアア！！」

「「ウルトラマンキングゥウウウウウウウ！！？」」

ー咄嗟の出来事に呆気に取られたキングはそのまま突っ込んできたバイクに思い切り激突され、そのまま下敷きにされてしまった。

「よっと…待たせたな、二人とも。」

「グギャ！？」

「「踏んでる！踏んでるから！！」」

ーバイクに乗っていた何者か…緑の眼にバーコードを彷彿とさせる様な独特のデザインの仮面、マゼンタや黒を基調としたボディ、十の紋章が描かれたベルトを着けた仮面ライダーディケイド、彼こそがキングが呼んだ三人のヒーローの三人目であった…しかし、遅れてやって来たくせになんら反省の色もなく堂々とした態度、さらには愛機・マシンディケイダーから降りる際にキングの頭を踏みつけるという暴挙をやらかしたためゼロとデスティニーからツッコまれた。

「ん？じじい、何呑気に寝てやがるんだ？ム…血が出てる、一体誰がこんなことを…？」

「お前だよ！お前！」

「尾前打代？女か、痴情のもつれって奴か…全く、年甲斐もなく…やるじゃねえか、このじじい。」

「ワザとか！？それとも単にボケてるだけッ！？」

ー血の海に沈んでいるキングに今更気づいたディケイドは寝てるのだと思ったがゼロの言うようにこうなったのはディケイドのせいである…だがディケイドは反省どころか尾前打代（おまえ・ダヨ）なる女を架空の犯人としてでっちあげる始末…デスティニーには最早ディケイドがワザとやってんのか天然なのかサッパリ解らなかった。

「おい起きろ、いつまでも寝てたらラチがあかねぇだろ、ほらほら…。」

ーディケイドはのびてるキングの胸倉を乱暴に掴んで頬にパシッパシッと平手打ちして叩き、目覚めさせようとしたが中々起きない。

「オラオラ…。」

ーバシッバシッと叩く音が強まるがこれでもまだ起きない…。

「オラオラ！！これでどうだ！？オラオラオラァッ！！ウヒヒヒヒッ！ホレホレホレホレッ！！ヒャーハッハッハッ！！」

ー最終的には、平手打ちがガッガッと、派手な殴打と打撃音に変わり、ディケイドは叩くうちに段々悪魔の本性を全開にし、ヒーローらしからぬド外道な笑い声を上げてキングをボコッていく。

「ええかげんにせんかい！ワレェエエエエエエエエエエエエエエ！！」

「おお、天然ＳＦＸ。」

「「すごい技持ってんのね、キング…。」」

ー流石目覚めたらしく、キングは自分の口から自分の頭蓋骨と入れ歯を吐き出した上に目玉と舌を螺旋状に回転させながら飛び出たせるという漫画チックな超リアクションをしながら激怒した…ディケイドは冷静に、ゼロとデスティニーは呆れたように呟いた。

ーキング御乱心の数分後…。

「取り乱してすまなんだ、コホン…早速本題に移ろう、何故お前達

三人を呼んだかというと地球にかつてない危機が迫っているからじゃ。」

ーキングが三人のヒーローを呼んだ理由、それはコロニーの遥か彼方に位置する惑星・地球になんらかの『危機』が迫ってるとのことらしい…。

「はあ？地球だと？本当だろうな、じじい」

「あの辺境の青くて小さい惑星(ほし)のことですか？」

「なんだってそんなところに…？」

「じじい言うな！ディケイド！！」

ーディケイド達はスペースコロニー出身のスペースノイドのため地球に危機と言われてもピンとこなかったし、地球に関してはせいぜい青っぽいチンケな惑星程度にしか知識に無かった。

「…と、いうワケでお前達三人には早急、に…。」

ーキングは一刻も早く彼らを地球に行かせようとしたが、肝心の三人はというと…。

「食らえディケイド！！『オーロラレボリューション』！！」

「チィッ…やるな！デスティニー！！だがこれで決める！！『島と大地の怒り』！！」

「クソッ！負けた！！後は任せたぞ、ゼロ！！」

「よっしゃぁ！仇は取ってやるから安心しなッ！！」

—…途中から三人はキングの話をシカトし、格ゲーに没頭していた…。

「人の話を聞かんかいィイイイイイイイイイイイイ！！」

—キングは三人の無礼な態度に大激怒、怒りのオーラ全開で怒号を上げたその瞬間…。

『FINAL—ATTACK—RIDE…DE・DEDE・DECADE！』

「でやぁあああああああああああ！！」

「ぶべっ！？あぁああああああああああああああ〜！！」

「「あ…キングが…。」」

—ディケイドはカードを一枚自分のベルトに装填し、電子音と共に跳び上がり、十枚のカード型のビジョンの真ん中を貫く様な形で左脚を突き出しながら突っ込み、キングの顔面に必殺技である『ディメンションキック』を放つと、キングは吐血と共に派手にブッ飛ばされ、窓をブチ破り外へと投げ出され、哀れ…地上へと落下してい

ったのだ。

「あ、あ…おい、ディケイド…これ、マジでキング死んだろ…？ここ、一応20階くらいの高さだぞ…。」

「いや、『人の鼻血を拭け』って言われただろう…鼻血拭くには鼻血を出さないことには不可能だからな…だからキック放ったんだが…。」

「『人の話を聞け』じゃなかったっけ！？それにお前のキックはキックでも全てを破壊するキックだからッ！！殺傷力満載だからッ！！」

一単なる聞き間違いだけでこのようなバイオレンスに至ったディケイドにゼロは青ざめ、デスティニーは絶叫しながら的確なツッコミをしていく…と、ここで王室に向かっていくつもの足音が近づいてくる。

「やべえ！近衛兵だッ！！さっきの騒ぎを聞きつけたんだッ！！逃げるぞッ！！」

「ギャー！！逮捕されるゥウウウウ！！」

「お前ら、早く乗れ！」

一外や城内にいた兵士達が落下したキングに気づき、偉大なるキングをこんな目に逢わせた不届き者を捕らえんとして動き出した模様、三人はマシンディケイダーに乗り込んで逃走を計った…ヒーローがバイク三人乗り…。

「「「どけぇ！！」」」

「どわッ！？」

「ぐぎゃあああ！！」

「クソッ！逃がすなッ！！あいつらがキングを殺った犯人だッ！！」

ー三人は迫る兵士達をかい潜りながら城内を爆走、兵士達はビビッて思わず道を開けてしまったり、運の悪い者は撥ねられたりしていた、近衛隊隊長・ゾフィーは兵士達を引き連れて追い掛けるが…。

「でぇいッ！！」

「後ろは任せろッ！！」

「「「ぎゃああああああああああ！！」」」

ーゼロは自分の頭の二本のカッター・ゼロスラッガーを投擲し、デスティニーは大型ビームランチャー・高エネルギー長射程ビーム砲で近づく連中を次々と倒し、まんまと逃亡に成功したのだ。

「おのれ、逃げられたか…。」

ーゾフィーは苦々しく三人の後ろ姿を見ることしか出来なかった…。

「まさかキングが殺されるとは…ん？待てよ…キング亡き今、このコロニーの未来を担うべきはこの私では…？イィイイヤッフォオオオーッ！！今日から私が新しいキングだッ！！」

（（（えぇぇええええ！？）））

―こともあろうにゾフィーはキングが死んだ（？）ことをいいことに自分が新しいキングなどと興奮気味に宣い始めたため部下達がショックを受けた…どうやらこのコロニーにはロクなコンパチヒーローがいないらしい。

「さあ！みんな！！私について来…。」

「ワシはまだ死んどらぁあああああん！！」

―早速偉そうに部下達に命令を下すゾフィー…だが突如、その背後から全身血まみれのキングが現れ、自らの生存を激しいシャウトでアピールした。

「やだーい！やだーい！キングは死んだんだーい！私が新しいキングなんだーい！！」

「「「現実を見ろー！！」」」

―現実を受け入れられないゾフィーは床に仰向けで転がり、駄々っ子ダンスを踊り出したためキングやゾフィーの部下達が盛大にツッコんだという。

―その頃、三人のコンパチヒーローはというと…。

「オイ！どうするんだよ！もうコロニーに帰れなくなっちまったぞ

！」

「下手に戻ったりしたら間違いなくムショ行きだな…。」

―あの後、うまく逃げおおせた三人は宇宙空港からロケット（しかも飛ぶだけでやっとな安物のポンコツ）を一機強奪し、一応キングからの『地球の危機を救う』という任務のために地球へと飛び、広大なる宇宙をさまよっていた、キングを殺した（と、彼らは思い込んでいる）ため、三人は事実上、国外永久追放状態…ゼロとデスティニーは自分達の現状を今になって嘆いた

「まあまあ、そう自分を責めるな、見ろ…あの夕陽を。」

「「全ての全てがお前のせいだぁあああああーーーッ！！」」

―…しかし、全ての元凶であるディケイドはというと反省の色などまるで皆無であり、落ち込む二人を意味不明だが慰めた、無論逆効果であった、そもそも宇宙に夕陽があるわけがない。

「む？見てみろ、アレが地球じゃねえか？」

「おお…！！」

「こ、これは…。」

―今にも殺し合いに発展しそうな雰囲気だったが、ディケイドが何気に発した言葉にゼロとデスティニーは窓から見えた『ソレ』に見入っていた。

―蒼く美しく、両手で支えなければ今にも零れ落ちそうな小さな惑

星…その名は地球。

「…あの惑星に危機が迫ってるなんて信じられないな…。」

「ああ…オレ達、コンパチヒーローの力が必要な時が再び来るとは…。」

「フッ…待ってろよ、地球！オレ達が今すぐ行ってやるからな！」

―三人のコンパチヒーローは決意を新たに、不安と希望を胸に秘め、地球へ向かった…。

第一話―集結、三人のコンパチヒーロー！―（後書き）

イロイロとツッコミどころ満載な第一話…さて、何故にあの組み合わせにしたかというと三人ともどことなく反抗的なイメージという共通点（そう思うのは作者だけ？）がギャグバトルな作品に役立つかもと思ったからです（オイ！）

ディケイドに至っては今年3月に発売予定である『グレイトバトルフルブラスト』に登場するのに何故出した…（汗）理由としては私の初の連載作『仮面ライダーディケイド―クレヨンしんちゃんの世界―』の主役ライダーで思い入れがあるからですね、但し…本作のディケイドはあくまでも『仮面ライダーディケイドそのもの』であって『門矢士』ではありませんのでご注意を…そのせいか外道ぶりが士以上に、どうしてこうなった！

偉大なるウルトラマンキングのまさかの死亡…（生きてるワイ！！）本作のウルトラマンキングはこの先ずっとこんな感じで身体を張ったキャラで愛すべきネタキャラ・ゾフィー隊長はキングの座を狙うアレな人になると思います（やめんか！）

三人のハジケリスト…ではなくコンパチヒーローの運命や如何に？
それではまた次回、幻龍でした！

第二話―腹が減っては戦はできぬ―（前書き）

・前回のあらすじ

キングをＳＡＴＳＵＧＡＩ（死んでない）してしまったディケイドのせいでコンパチヒーロー達はスペースコロニーに帰れなくなってしまった、仕方なく彼らは地球の危機とやらのために地球に向かっていくのだった

第二話ー腹が減っては戦はできぬー

ー？？？

『…来る…。』

ー何処とも知らぬ果てしなく深い深い闇の中…何者かがそう呟いた…。

『ほう…来る…とは、なんのことだい？』

ー闇の中で背中に奇妙な形の固有武器を背負うガンダムタイプのモビルスーツが、緑色に妖しく輝く眼に銀色の鎧姿の赤い刀身の剣を持つ仮面ライダーの様な外見の剣士へと語りかける。

『…我々の邪魔をする者達だ…。』

『はあ〜ん？オレ様達の邪魔するだァ〜？そんな連中、オレ様の手にかかりゃあチョロいモンだぜぇ〜！！』

ー仮面ライダー似の剣士は自分達の障害となる存在がいずれ来ると予感した、しかし彼の背後から禍々しい形相の顔に黒い肉体のウルトラマン似の戦士が現れ、自分達に迫る障害など取るに足らない相手に過ぎないと宣う。

『慢心は自分の足元を掬われるぞ…。』

『ケッ！偉そうに抜かしてんじゃねえよ！』

ー銀の剣士が警告をしておくと黒いウルトラマンは舌打ちしながら闇へと消える…。

（クク…このオレの剣を疼かせるとは…楽しみだな…。）

ー銀の剣士は自分の剣を一振りしながら不敵な笑みを浮かべ、近い未来、自分達と戦うべき相手との戦える時を待ち望んだという…。

ーその頃、その近い未来に戦うべき相手はというと…。

ー地球のどこぞの山奥。

「「「…。」」」

ー大破したロケットと共に犬神家の一族みたいな格好で地面に頭から突き刺さっていた。

「…おい、生きてるか？」

「ぶはっ！！な…なんとかな…。」

「ゲホッ…ゲホッ…奇跡だ…。」

ーディケイド・ゼロ・デスティニーは頭を地面から一斉に引き抜き、

互いの無事を確認し合った…正直、こんなギャグ漫画みたいな有様で助かるなんて思いもしなかったようである。

「しっかし、まさかの着地失敗とはな…。」

「はあ…先が思いやられるぜ…。」

ー地球に着陸しようとロケットを近づかせたはいいものの、大気圏&地球の強力な引力に引かれてしまい、しかも安物のポンコツロケットのため、地球の空に入った頃には完全にバラバラに分解、彼らは大空のノーパラシュートダイビングをするはめになり現在に至る。

「さて、ここが地球か…とりあえずこの山降りて街にでも行くぞ。」

「そうだな、地球の危機に関する情報を集めないと…。」

「知るかバカ！そんなことよりメシだッ！！」

「「ええ！?」」

ーディケイドが言う『街に行く』という発言が迫る地球の危機に関する情報収集ではなく、まさかの腹ごしらえ宣言だったためナイスなリアクションで驚愕するゼロとデスティニーだった。

ー時同じくして、スペースコロニー・キングの城。

「…ったく、前回はエライ目に遭ったわい！」

ー包帯姿のキングはコンパチヒーローとは到底思えない外道・ディ

ケイドの狼藉とゾフィーの下剋上宣言（キング生存のため当然却下された）にプリプリ怒る。

「…折角のキングの座が…ゲフンッ！ゲフンッ！いえ、なんでもありません！」

「…普段お前がワシのことをどう思っとったかがよーく解ったわい…。」

ー未だにキングの座を奪う気満々なゾフィーの不服そうな顔と態度を見て、キングの頭には彼を隊長の座から降ろそうかという考えがよぎった。

「しかし、ゼロとデスティニーが付いてるとはいえ…。」

「…ディケイドなんかに任せて大丈夫でしょうか…？」

ー近衛隊副隊長・仮面ライダーZX、近衛隊員・Zガンダムは不安を隠し切れなかった…ゼロとデスティニーは比較的まともな部類（？）だが、ディケイドは昔から目茶苦茶な奴だったためかなり心配なのである。

ーその一例として、一年程前のこと…。

「やれやれ…こう、雨が続くと気分まで枯れそうだぜ…ふむ、そうだな…。」

ー人工酸性雨が降りしきるスペースコロニー内をマシンディケイダーで走り回るディケイドは溜息混じりで呟くと、途中、どうやら何かいい考えを思いついたようだ。

「こんな時には一丁ハデにパァーッといくか！」

—ニヤリと悪戯めいた笑いを浮かべつつ、彼が向かった場所…それは…。

「うおらぁああああああああァッ！！」

「なんじゃあ！テメーはッ！？」

「ここが宇宙関東悪道会の事務所と知ってのことかッ！！」

—なんと、宇宙極道（スペースヤクザ）の事務所だった、いきなりドアを蹴破って殴り込んできたディケイドを見て、如何にも悪そうなツラ揃いな『宇宙関東悪道会』組員の皆さん…怪人・怪獣・モビルスーツ達が一斉に立ち上がった、しかしディケイドの顔を見た瞬間…。

「ゲェッ！？あ…あの野郎は！仮面ライダーディケイド！？」

「ガチョーン！あのディケイドか！」

「や、奴が噂のディケイドかい！！」

—全員血の気が引いた様に顔が真っ青になった…何故ならば。

(今まで奴に殺された悪党の数は軽く三ケタを越えるという…！！)

(『暇潰し』で悪党を殺す本物のサディストだ…！)

(何しに来たんだよ〜！オレ達、最近悪いことしてねぇぞッ！？)

ー…ヒーローの間だけでなく悪人の間でも評判が最悪な存在であり、悪人と見るやいなや、いきなりSATSUGAIしてしまうような極悪野郎だったからだ…本当に主人公か、コイツは…。

「全員動くんじゃねえ、動けば撃つ。」

ーいきなりディケイドはカードファイルの様な武器・ライドブッカーを銃型のガンモードに変えてスペースヤクザの皆様に突きつけた…一同、脂汗を垂らしながらの緊迫状態と化した。

「あ、お前ちょっと動いた。」

[ATTACKーRIDE…BLAST!]

「ギャアアアアアアアアアア!!」

ーなんと、明らかに動いてなかったのに、とんでもなく無茶苦茶なことを言いながらディケイドはカードをベルトに装填して組員であるザクIIを一人、銃撃技『ディケイドブラスト』で射殺するという暴挙に出た。

「ザ…ザク一郎〜!大丈夫かッ!?」

「動くなって、言ってんだろ。」

[ATTACKーRIDE…BLAST!]

「あべしッ!?」

ー組員の一人であるバルタン星人が先程撃たれたザク（ザク一郎）に思わず駆け寄ってしまう…無論、ディケイドがそれを許すハズもなく、バルタン星人の頭をディケイドブラストでブッ飛ばした。

「オラオラオラオラオラオラァァアアアアアアアアアア！！」

「ATTACK－RIDE…BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！BLAST！」

「「「ぐぎゃあああああああああああああ！！」」」

「「「だ…誰か助けてく…べばぁああああああ！！？」」」

ーディケイドはディケイドブラストを狂った様に乱射したり、鋭い蹴りをかましては相手を蜂の巣にしたり、頭をブッ飛ばしたり…その度に相手は悲鳴をこだまさせながら、血液や脳漿を辺りにブチ撒け、無残な肉塊と化してしまう…。

「ヒ…ヒィイイイー！もう無茶苦茶だぁ～！！」

ー組員の一人であるショッカー戦闘員は堪らず部屋から這い出ようとしたがそれを見逃すディケイドではなかった…。

「KAMEN－RIDE…HIBIKI！」

「はぁあああ…ハッ！！」

ーディケイドはディケイドライバーに新たなカードを装填、すると

電子音と太鼓を叩く音と共に紫色の炎に包まれ、気合いで炎を振り払うとディケイドは紫色の逞しい肉体に赤いくまどりが付いたのっぺり顔に二本の角を生やした鬼の様な戦士…仮面ライダー響鬼の姿となった、ディケイドはカメンライドのカードの力により、九人の仮面ライダーの姿に変化することが可能である。

［ATTACK－RIDE…ONGEKIBOU－REEKA！］

［ATTACK－RIDE…ONIBI！］

「ヒャッハー！汚物は消毒だぁー！！」

「「「熱ギャア゛ア゛ア゛ア゛ァアアアアアアアアア～！！！」」」

ーディケイド響鬼は鬼の顔が彫られたバチ…音撃棒・烈火をアタックライドのカードで召喚し、火炎弾を飛ばして逃げようとした者全員を爆砕したり、口から炎を吐き出す鬼法術・鬼火で火だるまにしたり、事務所を炎で全焼させたりとやりたい放題大暴れしたのだった。

ー…こうしてスペースヤクザ・宇宙関東悪道会は世紀末のモヒカン頭の悪党さながらのヒャッハー！ぶりを発揮する悪魔(ディケイド)の手により、事実上…壊滅することとなった、長く降り続いた人工酸性雨が原因である…。

「「…もしかしたら一年前の惨劇どころの話ではなくなりかねますよ、キング…。」」

「…ライダー族の代表にディケイドを選んだことを今更ながら後悔したわい…。」

ーZXとZガンダムの話を聴いてキングは大きな溜め息をつきながら、自分がライダー族から選出したディケイドに対して期待と不安が混じった複雑な想いにキリキリと胃を痛めるのであった…。

「頭痛や胃痛で入院なさるのでしたら支配者の座…じゃなかった、後のことは私にお任せ下さい、キング。」

「お前はそれ以上アゴを動かすな！ゾフィー！！ブチ殺すぞ！Fuck！！」

「キング！！お気を確かに！」

「ただでさえ高い血圧が上がりますよ！！」

ー隙あらばキングの座を奪いたがる浅ましきゾフィー隊長のしつこさにキングは怒りがウルトラダイナマイトなキングが彼に殴り掛かろうとしたが慌てて止めに入ったZXとZガンダムにその場で取り押さえられてしまったのであった。

「はあ…はあ…！！…で、三馬鹿共はどうしておる？モニターを出せ」

「ハッ！」

ーようやく落ち着いたキングはZXに命じると彼はリモコンを操作する、すると王室の天井からモニターが降りて、地球でディケイド・

ゼロ・デスティニーの様子が映る…。

「オヤジ、おかわりだ。」

「アイヤー、お客さんスゴイネ～！特にそこの顔面バーコードのお客さんなんてもう２０杯目アル～！」

「おいゼロ、顔にメンマ付いてるぜ。」

「本当だ。」

―…街中にて、胡散臭くアルアル言ってるチョビヒゲのラーメン屋店長の屋台で呑気にラーメンを食べていらっしゃっていた模様、顔面バーコードことディケイドに至っては２０杯目突入であるし、あまり乗り気でなかったデスティニーとゼロもなんだかんだでディケイドほどではないがラーメンを食べまくっていた。

「オヤジ、さらにおかわりだ。」

「２５杯目アルヨ、お客さん…スゴイネェ…。」

―淡々とラーメンを食いまくり、さらにおかわりを要求するディケイドの食欲にインチキ口調の中国人店長は感心せざるを得なかった…と、その時。

『…ばっかもーーーんッ！！何を呑気にラーメン食っとるんじゃああああい！！』

「「ブブォッ！！？」」

ー突如、宙にモニター型のビジョンが浮かび、キングのドアップ顔が映ったのでゼロとデスティニーは目玉を飛び出させる天然ＳＦＸリアクションで驚愕しながら鼻や口から麺を噴出させる。

「バ…バカな…キングは死んだハズ…だよな…？」

「ひっ、ひぃいいいい！！ナンマンダブ、ナンマンダブ…！！」

『まだ生きとるわ、馬鹿共がッ！ウルトラ族の奇跡と神秘の力、そして根性でなんとかなったわい！！』

「チッ…しぶっとい、じじいだぜ…。」

『お前はホントに反省のカケラも無いのか！？そんなに人を殺したいのかッ！？』

ーゼロは青褪めた顔でガクガク震えながら、デスティニーは数珠を握り締めて必死の形相で念仏を唱えて死んだハズのキングの生存に恐怖したが、ディケイドだけは舌打ちしただけであまり驚きはしなかった…イロイロとぶれないディケイドの態度にキングはこめかみに青筋を浮かばせながらブチ切れた。

『全く…お前達を地球に行かせたのは遊びに行かせるためじゃないんじゃぞ…コホンッ…』

（（よかった…逮捕云々の話じゃないんだな…。））

「オヤジ、おかわり。」

「も、もう３０杯目…お客さん、マジハンパねぇアル。」

『おのれディケイドォォオオオオオオ！！』

『『キング、どうどうどう…。』』

『馬じゃない！！』

―幸い、キングがモニタービジョンで現れたのは彼らを逮捕するわけではなかった、軽いお説教程度で済んだがやはりディケイドは『ムシャクシャしてやった、反省はしていない』の精神でラーメンを食いまくっていた…キングは某眼鏡の自称『預言者』のオッサンみたいなことを叫びながら身を乗り出すがゾフィー達に止められた…なんかもうカオスな状態である。

『…この際、奴(ディケイド)はほっといて話を進める…お前達三人はこれから地球出身のヒーロー達と合流し、彼らと協力してこれから起きるだろう地球の危機に立ち向かってもらおう。』

「へえ…ヒーローってコロニーだけじゃなくて地球にもいるんだな…。」

―キングは三人に地球に住む現地のヒーロー達との合流を命じた、ちなみにコンパチヒーローは宇宙各地のスペースコロニーや惑星だけではなく地球にも存在しているのだ。

「よし、早速会いに行…」

「ぐあああああああああああ！！」

『…なんじゃ！？』

「今の悲鳴は…！？」

―どこからか悲鳴が聞こえ、一同に戦慄が走る…。

「ちょうどいい、腹も膨れたことだし、食後の運動といくか…行くぞ、お前ら。」

「おう！！」

「へへっ、腕が鳴るぜッ！」

―ようやくディケイドは重い腰を上げて立ち上がると彼に続く様にデスティニーとゼロも屋台から出て、三人はマシンディケイダーに乗り込んで悲鳴が聞こえた場所へ向かうのであった…果たして、先程の悲鳴は一体…？

「アーーーー！！コラコラー！！お客さん達、お金を払うアルー！！」

―…ラーメン屋のオヤジは金を払うのを忘れて疾走する三馬鹿ヒーロー達をランニングで追いかけはじめた。

「フッ…上等アル、この私は一度も食い逃げを許したことは無いアル、必ずや金は払ってもらうアル！」

―こうしてコンパチヒーロー達の戦いのゴングが鳴らされ、そして事実上食い逃げされたラーメン屋のオヤジはラーメン作って３８年…意地と執念に懸けて彼らから代金を徴収せんがための決意を固めたのだった。

第二話ー腹が減っては戦はできぬー（後書き）

第二話…冒頭に現れた三人の怪しい連中…特徴的に三人のうち二人はモロバレですね（汗）彼らの本格的な出番はかなり後になります

イロイロぶれない（？）我らが愛すべきネタキャラ・ゾフィー隊長、しつこ過ぎる程にキングの座を狙っております（汗）あのスペースコロニーで比較的まともなのは部下であるＺＸとＺガンダムだけです

世界と常識の破壊者・ディケイドは既に前科者でした！ヒャッハー！てかスペースヤクザってなんぞ？（汗）

呑気にラーメンに舌鼓を打ってたせいでキングの怒りを買うコンパチヒーロー達、そんな中でもマイペースなのがディケイドクオリティー、コンパチヒーローは宇宙だけでなく地球にも、あらゆる世界にもいます

次回は戦いのゴング代わりの悲鳴を皮切りに彼らの戦い、そしてラーメン屋の親父（↑コイツ関係ないだろ！）の食い逃げ阻止＆ａｍｐ；代金徴収の戦いがいよいよ始まりますのでお楽しみに、それでは！幻龍でした！

Ｐ．Ｓ．ちなみにラーメン屋の親父のイメージはサイボーグ００９の００６です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0603ba/

THE GREAT BATTLE OVER DRIVE

2012年1月2日10時51分発行